根無草

お

五一

人 遠 13
1716
1

根南志具佐序

余讀斯篇也不覺撃節驚呼曰咄人邪鬼邪無能名焉蓋可測而測可言而言旦暮萬古咫尺六合世有若人而為若事亦曷異之若乃冥途潛府黝昧浩渺瞿曇氏者姑舍其他雖有明者不能窺測也而斯篇能測其不可測也能言其不可言也紀事詳悉

鬢庭藏書之印

へ 13 1716 1

屬辭壯快波瀾變幻不可端倪嗚呼人邪鬼邪果無能名焉童子秉燭曰儻有類董常華胥之遊者非邪

寶暦癸未秋九月黑塚處士題

自序

古人の陳紛看了笠の[illegible]ら[illegible]
あれ[illegible]ば[illegible]鉏鍛の口袮引手袮引京の[illegible]の
[illegible]して[illegible]のおさ[illegible]んをさそてひね江戸[illegible]
口[illegible]かいましひとつほけや[illegible]の人と[illegible]を絹を
遠へども皆て[illegible]して[illegible]て[illegible]て仕舞ふ
命を[illegible]つき会を刈かる人[illegible]も大
侍も[illegible]も[illegible]人[illegible]を
上[illegible]佛を[illegible]合の層を[illegible]りて[illegible]せ

和穂なしまハ釈迦が揚力を放れざも皆是ならまゝ
歎乃世の中なり一日貪欲を何事来て知じ事
のりを源ぬ尋ねども去るつまで懇ろる病の
膏肓に入てる斯文なりとを治せんとするに
織乃炎業の及ぶ婚姻せまよいのちもをと戒小備と守
すれバ彼日尊人物を食せざるしや釈迦のいろ
をさ又日ゑして正直なりかし仏法をそ
すまバ又日来まよう恨生なり悲甚をまず絢を
沸と法海へ家門の口を出て井へ流るして両後

教を受べし耶蘇よ翻りて耶手筆をと魏ろ
式篇とあし名て根南志をはとしふ経加の
卵をも花の能く紫式部が恐しハ百よりずべき
まそうしざまでも此人情を備るとおみてハ
彼も一時なり是ても一時なり

安なえ年冬十日　で笠浪人作

[seal] [seal]

根南志具佐一之巻

公無渡河公竟渡河堕河而死当奈公何と詩に作りしハ見ぬ唐土
古文の水に溺て死るをひかん之に霍せる妹子の歎き
とかや爰に宝暦十三の年水無月のころ荻野八重桐と
いへる俳優人の水に入て死る事世の人が話のたねとなりして
仏経に定まることなしと知る命ハ見る由て見る処是に皓々ゑ
士農細工世俗の藍培が家の母やら生どり海ら泪みに流し座原
旅よとあふれ龍宮の玉を取らんと海底に入て命を捨るも
海人にも異ならず世に知らぬ世界の極楽と地獄の真中に

閻魔大王と申すハ名ある役人とやらさ三方拝海しかる其大王三十世界
を預り申すことなれバ十王を始として朝廷の臣下家来も限
りなしの役を司者多しや総ハ人間の世渡り士農工商の家業
も取ざかし閻魔王とても昔ハさのみ閑暇もありけるしが
近年ハ人のやりもかしましく悪る世の人ごとの悪作りことの多く日まして
罪人の数増すりもわるき総ハ前ニとかく有来の地獄まてハ中々
地面足らずとて閻魔王大ぎりの手形を鬼ハ山師共ハ秘一と
内證して新地役人にてまとん近徒緒絡かせらそて拵への所あらせ

極楽海道十万億土の内にて空き地とみて之地獄帝の領る奇子
白の通まても地以とき数百里の地をこ塚獲物を世んして
血の池を拵山を築て八叙の苗を植させ罪人をきらく引も
地獄卒共の手を届き総ハとても火車をき仕立させ焦熱地獄にハ
人柳とて仕かけ其外叫喚大叫喚等活黒縄無間地獄等々
外にわるたちは地獄を拵へて焦熱地獄とかし三途川の
焼も其人みてハなかしてかりけりぬとしる後地獄に堕居
たゞし浅草北一面の焼安宅の原の黒塚焼堺町の草焼其外

浚渫して娘をいだき親子ともに溺るゝ悪魔の罪をば救ひ
あり三途川の姥の如堀に入て浜に地獄を広まりけれハ加乃
山師たちて取をおこし何卒新地獄町の大屋に東屋より取
去かし獄卒どもの分ハ掃除代へ上りやうしぞ節句銭若瓮
に御宝くらゐと取へとも舌を抜接乃合扱の棒火の車まで
請おひ公とも新田に結び繕ひけりハ古地獄にくらべ底のぬけたる
なとを集て請負せ竹の根を掘燈も燭台の切屑を
賞上こかききりてもおぼ下直に付いがいのことにても地獄乃

年貢ハ仮初にも百万ぢらかゝらぬ名ばかりのかなきハ甚だ騒々しく山師
共の談みて三途川の古名をも喜んで座に付けまじく思ひけれ
ば獄卒共ハ浦一に御ますけ猛虎の皮の婦人登し
堅に法を達しハ猫の利あるにらんなるべきハ新地獄
の御こゝろおもひとおちの事十日と已に獄卒ともを揃へくし御為
ぶかしくよ通して数書地獄のおはなも今に油取せぬ
世の中とかゝる閻魔も御の政ではかせて
中の派もかされてなし獄卒共地獄の地の字も

ある罪人を先にたてゝ走入獄卒と引立来れ閻王これをみ給ふに
年ハ年の比はたちばかりの僧の色白く痩(やせ)たるに手が長く肩(ひ)
如何なる大膠のまゝに何やらん媚たる色ある所あり
つけてぞ有ける此者いかなる罪ありて来りしかと尋ねたまへば
かたはらより俱生神(ぐしやうじん)帳面をひらき申けるハ此者ハ南瞻部州(かんぜんぶしう)
大日本国江戸の開化なる堺町の若女形瀬川菊之丞
といへる若衆に深く迷ひ師匠の身の代りに立し
錦の戸帳を売代にかへて衍碁(まやうぎ)の作の弥陀如来ハ
仏壇の蔵へ御来迎(ごらいこう)迄若衆の恋の志よりして露の涙に濡る風が見所
て宝前牢(らう)に押込られしを如何思ひけん已が身を宗門よ
小頭の珠数をも離れぬにしぞ苦に病てむなしく成り
世をさりけるが旦那まつまれ苦しく思ひ候ぬハ路考が悴之
とて世をすてし身をもかへり腰に付るハ易き
諸信を思ひかきたる菊之丞に深く迷ひ若気とハいふながら
師匠親の目をくらまし寺の料一二種を託し
済今時の坊主ハ表むきハ精進(まうう)をいふ身のうらは女犯に

浮身をつし亀を明神葱(ねぎ)を神とあがめ名誉なり
かうえるは坊主の野郎(やろう)童狂とは羅刹に似たるは鉄の山
責(せめ)一等許(ゆるし)設の好不の釜へ仕らんと窺ふ閻王以
の外怒りたまひおうしが罷狂死に似てかかる都て
淫婦らし男と云ふことも有由我意合点ゆへに夫婦の
をは陰陽自然なれど八男若のことなれども同じ男をお
すことを決(けつ)して有まじきことなし唐にて八家世より
ありて書経には頑童(かんどう)に出附るることなかれと戒ましめ

周穆王(しうのぼくおう)は慈童(じどう)を愛してより菊慈童の名始り彌子(げいし)
瑕(りそう)董賢(けん)孟宗(もうそう)やら執(たぐい)多し日本にては弘法大師渡天
の砌流沙川の河上にて文殊を鉄かこひより文殊を
支利(ちゑ)菩薩(ぼさつ)の号ある弘法は我朝の祖師と崇名(とめい)を附し
鞍馬の奥の僧正谷の古天狗敦盛(あつもり)は須磨の浦にて討し
これしハリハドワコイと放さるとうる見れ牛若を天狗より
奇しき宗祇(そうぎ)久(ひど)りの業平(なりひら)後醍醐(ごだいご)帝(てい)の河熊(くまろう)信長(のぶなが)
の常花と名とる庭の文學入五六代の前より川
此ぬしいらざる保友(むろん)をとも々とく利鈍其所を交し

より娑婆にて死の来るといふ所に組婚して但馬の城の
蝦蟇根の瘤金之湯治する老若は皆此男女の有ゆへ
なり昔は嫁も斗がらとて極し有りや痛といふ字は冠に
るといふ字なり然るに通達は俗俗相ならべて好ことなれ
ふ場の立ならず今より娑婆世界にて男女相止て極に
忌も庶中後是なし大和今昔皆それぞれと申傳と申なる
十王の中にも轉輪王ごするみ有りて申なるは和室を好なるは
世にも似せられ王子事也て世をおんく後ふるく
ものや後て通り男女も文室好ききも一番を起され

こゝ宮女は比まれれば先て極くして中く同日の後は
うつしなさば女をゝその母に老のごとく男女を流と
有のとし其味の味も佳境に入ぜんで知がらし是は
早竟大王此有處は嬉がらず上戸の隣やと出るや
庶上戸のめしと上娑婆の評判を金有るゝ分ずゝ第一ぞ
絶名なる文芝居より世それなれば世あて此世の昔ひおよ
繪姿ありけれ尺にかけし此後又八の作事に男女色事もらしと
新圓王不機嫌ありて蘇吟なれども好くとはとうに
事なり我もまたつての新らしむかし繪姿とかへる

事は勝手次第なるべし。其のしおれかゝる花を見るにも
嫁いびりせし目閉て見ぬ振をするも同じ此風
させる人ぞ彼花人が持来りし姿絵を柱に掛るに
清如春柳含烟艶似桃花帯曉烟の姿の
ほてやかなる事忘もせられざりしが人々に目をとめなんば
あつと感じて皆々鳴をしづめて静也。傍に寄そふ
くしき若は天人のてらするを見人どもそれは天下無双
の書なりけり仏のごとくそれは巾をとりて同じなり。
○老なる天人なりとぞ喜びいさみて若者と共に
へて見る時は閻魔王が冠と脱衣の婆ぞかし種此

違ひありせしまゝ行る若者が初め古今無双の美童も
形を十王を始として見る目も嗅玉を驚かしかば冥
途をいふもしるも一座に有あつて半ば見る頭河坊
羅刹まで額の角を振立て感じける事止ざりければ
閻魔王さへ目を細しきりに涎しけるに越ならずあてや
かなる顔も笑しさにはそこそこ只花毛と奪衣婆の
とぬけのごとく惚て見てば玉座よりころび落ちんまで
皆々騒ぐいかなる死しても涸び正気なせよひ海
老婆かつと流き気ぎがくりし見る前に月をかまさる

なかし氷山えびしも法海寺のこやもやうかなるに迷ひ
多る心を何と遍照が身のさぬなる我なる深き
つゝしと捨まどるふ古より美人の以ちえ数もかぎりぬを
中にも倚ろから婦へを人をなし西施が傾る方小町が眉
楊貴妃が唇赫奕姫が皇后元慈が腰つき衣通姫の
衣装の花はるし色つくるもさる法華桐て実る殿山丹ハ
娘達て唯麦のなすこハ無との事花まも月にも菩薩
まこと文いる人へ起とおもふ人ハまた夜目本の地にかゝる
こその二度生れへとふ何うさまいハ露も其とより冥府の王

位を控海にかゝ世者に他のちはは王位のまさにも
何をせんと此月の内も去をいそらし由をかんと去る訓は
宗帝をかけお御神を色の人信を以てかるをはなけりぬ
大王の内ふるまひ所づゝ二人の多きにおかも冥府の王位を控
地獄にかゝる人々にまいらりるて地獄極楽の政ハ執行
若かし菩薩を忘るゝを訓るときは二十世界の底をハ何
並ぶ敷くとせんやうる出入も身をとし優きを冥と成
果なくば極楽に濁る今のまハ息ハ深くの有となり
いそりきれつゐいさふまた令れなる末ろまとやかしいて

快楽においては極楽の七宝も新造如来の黄金のたゞへまで
浄土にうけて下合色へ変て中り地蔵菩薩も大師弘法を同前と
子孔のはずりもの乞茶碗れど乞人がある八両国橋の乞丐にて
なり天人も女衒の手小廻りに三途川の婆八のり売婆と
乗じ仁王八辻行燈かゞやくに於ては地獄極楽
破滅せん八月のうつり替るにも天気のならざる世界なれど
みとあしぞますた之商世話人多て蝙蝠羽織に七眼
さし鋭なる国に恨させる胃媚男て天か捨てしものと
思ふ世界にても酒しまでぞ背後菩薩が京清の枕にて

にて四条を仰せしさへ要染の者共八おちおちてままを
いかなあく娘らうへさかもどうとき人多者と占補れ先色此
論破せらるるに付さ色八験する名は大日と云たりとて地
様より出る者もなんれ八法然浄界は今其名伸る入らまで
愛同してんするへ八業の内をれ大四得八なく八此宗帝
王御前にて抜ろうさぞかしやして四大菩薩らんと席を
打て傳ゑる下民主とろくと去なかしされらて八宗
帝王の傳るは比丘が狗をさずけて兵子太郎が眼を抜つき
本尊の光りか藤仲を倶て指掛けるやう七をさし

おそるゝ魔所にも日比は備し地の大王一旦御怒あらはしたる
車は雲じのぬかる氣焔一杯の水をも車輪の火にて
極からしいか猶に諒かるゝの車の尾牛の角は焰と
中りて恨して公為ふとなし山の如の手柄の二句に留すも
又ね世のものをあはれさ路考が海老に外冥府を探みまん
さい世上の悪事の万端を申して地獄極楽の主たる大王の
智と云ふべきに何しんぞ飛く四方をゆく車なしんな
使をつかはし百補て集しんに何象事の首へ起や候
もいかなるやられど一々屋し人を口を探らる王し評議

衆道狂に歯て降る大王もむと此れきせど泰山王
申けるは丈人生れては色業にのまれば是之は来る
さるれぬなどくの業性を論破かべしとて敷者させ
給ひしとくり返ひてやしされるは年の若月休如門市村
来七月中村勘三郎脇物みて死去しとはいへども菊
之丞が命はいますべき時にはいはも不便也きれ
なりても役さは行幸は腸を断をして役の民部
までも稲荷のなんぞと何とも喰つぬ手拭ひまでの
果をまも恵下まで人をもおへるも親父の添ふ寄り存せず

中〻表立ての御使とては嶋もよふも叶ひつゝみとかされ
れバ神通進みあてかれらそれこそ安き事なん
めり若君山の古府惣比良山の次ハ惣ねども叶はぬを
忽拙で参ん事にてあし従立行る天狗たちとあらそふと
皆つゝへども五覚王左だして抑を見いやし此仰儀
立る時ハ請ハ知らぬて猶も力を通ハせ州拙で
もし夜叉ハ悔て返しバそれより疫神を出させ
追放たしんとかさう迷バ変生王を始め打ゐつゝやく
疫病神とは人元の事人こそ山椒味噌を手頼り
転すハ始ぐさし大陽經に陰傳經をたどる
内をく太重御得意なるべくそれハ疫病神ハ御害なる
べし一向それ今世上に流布する医者ともよりかれハ
一始とても直り難き事疫神なども乃へき事
あらバ此使ハ一医者を見よかしとかさうそれハ諸るで
ら形づきなんとし殺す医者ハ従くれらんと従覚え
なるに一向に文字目なる医者ハこゝろつかつるなる薬
をとらんバ何の人かせくも六君子湯蒼朮気湯の我一服
の拙用さへつゝみふらせ下の薬あて内陽よ香おちらと

病家つまる所ハ一ッにて何々ッての割合を名付れ也
せんかたるゆへに毒ともなり薬ともなりされバ
其術しけずの事ハ格別なる殺事に於て
小文才のある医者ハ人を殺すが商売なれば一段
にても猿(さる)のまねにてしこかよふ間を増す思案何やく
近年の医者共ハ切流しと当流の何も(ぜんせい)てすみ之
不角ぶしに傷寒(しやうかん)病の食ハ一番人通りを知る
ぎる同事(こがし)式と傷医(きい)にぞ宿学ともに病を
見得ぶし葉ハ若くに浸小石膏(せきかう)芒消(ぼうせう)に[illegible]を用て

殺せし人も死て此世之事ん若様方の名をも悪く痩(やせ)おと
ろへて正まの地獄へ此世の事のことを[illegible]
形(なり)小なるまで是当世の一医者たちの目を眩(めくら)かし
らぬ仲景(ちうけい)孫子(そんし)張子(てうし)和(わ)などの何やらん得て
鬚(ら)鶯のまね似(まね)せたる鳥あまたかあり諸若葉毒
の中にて死しては花の色もさくもすべて引之ろく火葉の月見
只痩(やせ)おとろへ只(ただ)身を[illegible]て何も何しも何とて年に
まちぐゝの手柄よ妄に実を逢ひ
席地依涼にて日の本の大気の肌を富(ふろ)様

邪なの弁舌を利用が智恵目違が神通を切り然ども
正時もあるくは皆て勝が色ひをえらさせしと示し
さして道へばさしもの十王方役ふえて安まることあり智
恵も此様なれハ此上ても陰府へ使を立去ともれ明
韓信張良孫子呉子武烈蕭何鬼の
此軍師たちを直に陰府役人すしや事にあれハ果てたら
足るに古し眼の光鏡のごとく口耳のさとき所で切らせ
させて形あるをとらかあるをとんば人の一生の事とまん
所から情の役人たる目と云る者なり閻王の
前にすまいかなくの役役ハ先生にハ所の丸定武のるた
陰府の道人たちし軍師たちを直入ことハ此界の
恥辱といふことなし上役たちが智深計略にて此方
の智恵をなりずつされるがいたみ係とりして小智恵
此経助は後古今の地獄界再び出て上ハしだ上
閻王が下獄卒よゐるるの難儀なれど軍無をいはは
此世間たるべし私人の心にて者悪物ハ役目な
きむ人そんな不幸事とても唯白分を知させり前
道を知らしてむかの役者て取極びよかへ人をたまし

いふ事兼ねてなかりし此言葉に宗て縁なるべやなう
いはまゐらせんやとてより大王はひまひとれくらう
きゆうのすゝめりわ道の事なまて気をさわ庭
侍る之龍王也唯今に長ひそく数多の鬼の中分
見え候鬼とて生きく内に千里を行て千里を一夜に
地獄の六度仲ける一返みしを八度有する事も
かるなく八大龍王の想以難陀龍王年内と担は候
さて衣冠正しさはさしをはひ即ち金色の龍と化くる
き瑪瑙の冠瑠璃の瑤珊瑚琥珀の石の帯玻璃
の笏瑇瑁の沓異形異類の鱗ども後をかこみ
来向ひ四階のなかに惣れ伏て大王へ入るゝ小姓ん
ありゝしや龍王口ずから言事余の義にあらず此大王
こそ頼み候も心をとくとく来て南瞻部洲日
本此地は瀬川蜀江をもて入る所あまり有事を我
ゝ手に入ゝまんとあさまし評議せしに彼の蜀江の
魚白紅桃色にあるとの事これ中にゝ何をなさでる
百捕事ゝ下してこのりゝ候龍王へ恩を知らせ熱いさし
侯りける我ら祖の若れなるを鯢鯨の災を知らして加

虎が杣法坊をたづぬる人と人の堂に妙を探てやつで出来
ふもとにありし香取に補佐して寝待を体せしめんとするを
なげかし御身のほどハ大王将監ましまして猶も菊亀の
まめなるハ奥の夜よりも新夫人とものさへ深せてかくも
さるべし御身に花の人かたがたへさりたり大抵将も近々きき
中川ものの逍遥の陰へおもむく道にまことに寂寞の坊をとめ
菊亀ちよ身をおもふに和ハ猶しきしが眼がなくも
娘ともがいかの事をかたりなばば再縁を返すべし
去りし時後菊亀を聞くとも法度になし無荒杉邸

菊池なんぞ和としてそれ湯浴み御用小立る道中の
君ハ免許なるぞと和良ありて御覧さつとお
あれハ龍王水底に海の皆々退散しけりけるを

極意之大概ニして

抑相伝の淵源を語るに地神五代の始天照太神
日の御神を治め玉ふにゆ彼素盞嗚の尊悪行を成玉ふに依て
よて隠れまし坐せば何事も麻布をもて振てどうちうを成
玉ふ天神孝と愁ひ合ひて何の通りの安寧丹まて入り
玉ふ心ありしそて然に異見有りけれ久しいとんちやりや
なりいかにとて深く思ひに後には何事の思ひの如き然じ
是が天神慎りして天の不完居に入まして天戸を閉て
籠り玉ふ故に六合の内常闇にて昼夜の相代をも分

そ神の種々の祈祷ありしも周旋ありけるが何の功なくして
昼夜の分ちなければ漏刻の端倪の分ちを治する
事能はざるが故に神の力を以自由にならぬ故に
猿田彦には中下りて拍手をすべき事なりとは
爰に士の神手力の神をいのりぬ西へ入せて神
あそびに祈合神と抓に抓合町に治りまして喧嘩
たまる僧もなし去て暑の夜れ亡目打流れまとて
了も知れど公へおかしてもかりよ算つかすます
て是非の事知らも付かざれば先世の中此明るく

紋よしハ名字の外太夫の外へ出さるものなり女世
間の出合とハ名酒服みても同じことなれど姉妹ハよ
きれる式ハ何の日にも出合中へしとらずを正月の節
の流の流絶みても何でもなく物をはふより出ての
始るよりおさ千へ配手にてをはじごさまざまに士農工
商の外し業を勤るをなさず中よりも金出
よてハいろを求人せと時を知り様で相同などいふ
事もなく花の時も姥様中もうけもなくなり
世き客を和の経さへつかりして結句能なきとて

来る若者も多かりしが次第に甚るかなびにてなくなりけれど
後よりハ若者もなくたゞ娘子さんちやよりは淫婦とは逆
さしも多かりし別段も料戸の凡は天のはさ雲を彼
えなりてのどく姥さまがみを焼様の艶様をかくおも
拂ふるみえして下る若も一向にすまさで忘ハ夫婦ハ凡
痛ハ古座りて若き若けをも呼寄コリヤてアミふさら
よう娘子さへ人顔よ難をも夢への耳をふりたて我
の後儀の絵もなく兄様への嘆ハさとでも目よ従
乃客をえん借の名前茶屋相宿も拂ふ人様あるへやし

せうむつき桐手をけし二幸が異ろふさ張花も坎艮
震巽の卦小あつき乃梅を上下押あって腰手
はよひと子爲ハ只前を紺緑ぬ代男よりかとなし
是でハ世ちきてかくはなりてたまる侭つと八百万の
神天の安の河邊小會て色々評儀あられけさして
もとし思ふ事も尽こえんじ式を石道小入れさせ天れ
窟屋を此切開んといふ若太神怒りひて荒立りた
まさなぐ義新派なるべし、こ評議又よ一決せざりし所
通杉氏の祖思兼神遊あらく宣ひけるハ中くかの

事なくハ四繊瑕ハ妻にはし太神常に祖宗を好み玉へハ
岩戸の前にら祖宗をかるゝし極ゝ岩戸を開きせ給ふ
事しかりけれハ皆々是極むなりと八迷ふあきけるな
鈴用ふたへ極役者をたて撰れけるに合ゐ役荒事角
かづらての一枚看板手力雄の神舟石不仏事座し
色事師には天児屋命敵役にハ太玉命けう
こ此の存ちる上巫極上々吉女房方は娘方お女房おなる
かうなる実ての若女形のてつぺん天の鈿女命をかた居なり
音あり想定其中小お扮狂言事月連続目小ふけ浦を

るものへ猿明月起りせしも悦ばしく稲荷山のめぐ
諸無れば芝居の元は其やの元しそれ〳〵のおひきの芝
ある批判は昔のことし天香山の五百箇真坂樹を植
て鏡をかざり常世の長鳴鳥を鳴かしめて香掛をそ
常闇の世を明らむる人代ふくしはいさとをなし岩戸の
携わりて神代地神代と定まりけりち暑をかざりき
女の舞しけるがいふの始ともつて緒にも刻順なり
だん書かんとやくやく誰をとるの地もなし識り
天地開闢其来かかる大仕組をいふる伝へて知るも知らず

ぬる者てふも云せしも謡一との人類集式を踏り
照りのはしも知られぬ見ぬ天の浮橋瓊矛日記一書月
より勝て神代より天が人と始めて申に事月より起りて天人
明命は磤馭盧丸なる名伊弉諾の尊伊弉冊の尊天細女命は
傾城浮名伊弉冊尊流行りし揚代に百毎の
今の代に天瓊矛を揚むることまさを吉玉命さら
太占の道なるの後にて女人の瓊矛を論議しめ検役
此役世からて検使の流れも女人の装ひの本は好むん
まに塩を加へよむしが細女のよ明を告玉を揺を抜安も

下もしくに皆喝もはやしければ此時天照太神少しひらいて
此ハいかなりたのしみぞれ手を出て岩戸を細目に開て
光を御覧ずれバこゝろえて三人の者走寄て岩戸を明んとす
を掛る人〳〵右神ハ衣をさすにてはえいやと引力毒
貞ちて又まなきまり時に向の切幕から皆〳〵と拡事の
太神ハ多くるつく今朕が岩戸をたてこもりやらてさせ
しと争所に皆々驚てわらハ何者なるぞと言ふ内
柳事備へく〳〵と大薩摩浄瑠璃を何うまへ
て切幕とさつと明楊のすかふよ太夫かん江市川流の

向ひのくまどり鬼ヲイニヤ神ウムエイ手力雄のをるゞモヲアと
せりふに味噌我ハ百万絶にてひろくと左右の者もなつく
岩戸を見てつまと碑くぶきて照太神をしおしなる中臣神
忌部神端物の縄を引渡日の神出させまひられハ昔
のめしのまゝ万人の面白くを入たりも天照を天て面白
やうふる此時はりぞ嬉しかる相又同じ神代に寿を
出見尊のちまにて火の酢芹命などは物也見かれ
ても今えならかりし故に舞をし赤地土を手ふぬりまよぬり
て前られしが一向にてなみて衣装えき居代を流ぶれ

ける文翰林葫蘆集なとを考れバ古ハ猿楽とも
云しを聖徳太子神の字の中に其ふを除き秦
の河勝に鋸にて引別せるを名付て申楽と云ふを後
此人申の字の首と尾を打切て田楽と略してある
何迷りて後ハ田の字口を抜て十楽なとゝも名付
候しと永禄の比出来の狂言を以て面白狂劇の名を
三ケ庄つとなん久る其女男と女婦の踊舞妓と名を
久今様の歌舞妓を出し夫より平安万代に興行を
其江戸ハ江戸風京ハ京風と分ち女の名を許り

よりてかゝる又浪花の芦の仮屋の伊勢なと名古
屋の舞台目安藝の宮島備中の宮内讃岐の金毘
羅下総の銚子なとで何濱ぬ所もなく毎年の小
哭にも興行して人だかりしも事となく太平楽をいふや
流行るハ當十分なりと覚束きなれど古来の世の数人を知らせ
は庶少して子学ぶ目にまでまる世俗のおそりと申する物にぞよ
いかしぞ天の下の宍戸る芝の人目を業と営ひ烏帽子
の緒を結る紐と紅白粉にて塗しと顔をも得を施さ
に女てせりぬれど出かしてうつくしい楽を常申る事にたる

いはさるもあり愚(おろか)なる人ハなかなか些(ささ)も虚(うつを)になりなとと云
るを傍(かたはら)の人ハ笑ハ何れ虚ならぬなりとも又虚さへ誠を
わかちてあらむと云るは但し虚も言ふてこそ味(あじ)あれ
我虚なりて人に信ぜられてハ誠さへ偽ともなり我か
後世にさせて見るならし自然を知るは面白きものなれど
凡そ昔も今も文字に書しるし馬鹿人の口やかましく
日をくらし大人の心の底をはかる事の見えつる年ハ歳々
聞て知べし曽子(そうし)ハ臧を見て武仲(ちうなん)の云人と喋(そうせう)
足をみて疑(ぎ)をはらさけんとを思ふ子下戸ハ萩をみてかる

餅を喰ひ歯形しハ浅漬を見て山葵卸(さびおろし)を思ふもみな
人々の好事ハ情(じやう)の移(うつる)が故なりぬことわりの事にて飲
ぬ者酒の名を上戸ハ忠臣の名をおぼえ悪人(あくにん)の好む
積善といふもひとつ余(よ)の事を好くとも心を用ゆる時ハ
害(がい)をなすとなかしすべて命(めい)を絶(たい)を養(やしの)ふ物にて
ある時ハ命をそこなひ酒と愁(うれい)ひと掃ふと云人も内猿(ないえん)の
愁ひとの古人の愁ひは酒なれ当事がことによりて一泊も
楼なるねかくハ遠島(えんとう)のなしぬ酒世ならハ竜角酒見えてぞうぞろ
なる用ゆるになりぞと知るべし書籍と鉛言徴(ぜんてうあく)悪の人にて

そる時は教へことなる戒ともなし芸ごとに溺るゝ時こそかひ
かくして戒と文人の妻女の振舞に役者の紋を付て
ひよいひよいを遁にして見らるゝ事もの異見に存
またなけまよつてかくのごとく長しと雪白に見せ行ては
仙りを求れける者は世に多し扨又役者に昔は名人多かりしが
当年は道の事は相手の相場もつりまぜそろへしあの
世之せりわたりて蓮の茶店へ出語りしてより深川遊
本様二言の芝居に餅海老取らへ身の骨もぬけて
みやのる地を嫁して名人の名残もなく今の頃を

これよりて文名人を呼ことは人の真似をなしてもやされば
諸芸稽古ぞする者の人よりおもはるゝ迫世人の心猶弱にして
小利口にして大なる度なる事なき者の役者は師に随つて
役者に業を伝へ置き根元を申する事の名を揚げ
近年の役者を師匠と云ふて名字をもらひて山上乗り
此様大役者の皮の名ある名人にて気を張合ひて頭て
深川まへき芸で学び見角女にも思ひなすとも一はし
我より目上なる者を非に入り味噌をよれば
名ある役者の親とも用まで縦一見の思ひなれても神

判然といへども大にちがふと深く人の子なき事ゆゑ施の至に惑を
みけるがごとし是皆人を用る事に深きなり今を
背振村小倍治といへる女形河内の藤井寺の寺住へ来りて
小山といふ所に宿したるが小倍治曰一日竹篭(かご)に申して血の
暈(みち)がおこりしといへば連にて有る竹中寺の宮師小松右源帥
原上源右衛門殿がいふには女形なれどもされて曰り
血暈といふは脂を見て居たるを顔に居たるも尤の事なるが
大に感じて曰昔より形も胴も女のごとくならんと曰はなし
なみより役者の頭痛も血暈も見へしは物にまぎれし

事なといへるは実にてと業を当る神る者は皆かくのごとく
ありたきものなり我は敵役にて常に人をいぢめ或は芸者
でするでも悪工をしとて日に二度も三度も打擲れても居る
やと理屈(りくつ)を付けまたたとへ文たに何にても悪しき事を
するに易し役を芸者らしくなきゆゑ悪人になる也何のさし
なき事なりと芸者に物語る事を聞きたる人ども感じけり
畧して女と見せる事にあらで人を用ひざれば上手とは云がたし
故に小倍治が深きに感じたるは事ある人の気の道
いふ女形にて舞台へ出てもやさしくも又女をたもつも

常の身持を守りつゝても飯顆の大服物をかつえ
きて随ひして茶碗の清茶(さいざ)をもちかへし出すにも
をかしきまゝしまり身にそのもちこゝ思ふる佛神を施して
見る時の往門をも知り居る旬隣りなりと人魂猶遠ふる
るなし彼一惣評判せし名人の名を得るとならすにて
うつりかへし如くる中にも蓮華流潟よ之菊ね玉の盃
渊川菊慈童とかんいへる彼女般若此人の長菊之水を濁世(ぢよくせい)
にをおくねの古の年より壽如しける御振舞二萬ふの此
よりも生き野菊の形に何くれと評判へてる佛筆をも

外に並ぶ菊とてもなきれ今こゝに津小此岸はして
此慈童なりしとの菊の流末もくさ若老して有る
比しを千年九月九日の日より是付て今年こそ之にて住
出精菊の評仏させて信仰に照らのかりたる流布なりまで異なし
いつよりも深く見らんを仰するがてく尊く面るに何より
そればい人を汗さたりて消ゆれんと老大の古を解しくれ
と擬(ぎやう)ふ人を是迄さへん支流のくへんうりたり菊慈童
家来に有て異なるをらん若者なる処に同者女般若也
八年桐来りたるが同者の神といひするに歎此菊命しの中

かりの名も丸中なれど人に色べきかりしもなりしを見まいらせと
三保の松かげで羽衣をぬいで松さかの松あひなしかけ打
解れバ菊之丞ハ浪花ぶりと流行し扇の風破り
さまし瀬川めく人なれ若なれど菖蒲とはあるらい
天人をみてのこそてなり一ツ二ツの物語も出来る足の浮なるが
八重桐と云けるハとけて今とよハ若紫を流行なる瀬川のときは
るまでまでよなき縁のなり書付御と芸者も体のるりな
古も一日女形へハいまよと菊之丞の日影も思ふて見へけり
なじみ事好女と繕ひて打る新あれども いさや一日物ごし様遊人の

役者しハ連をも後に見へし云のしはまり大勢をたのしく
しけきハとてまより来んすぢ目と目色を交る篇舎をかす
中村といふ名のかつぎ使して心なしたるにいつまでも忘る
見しこの道事なるとて見にしてすぢ目まねりとき見え
秋中の事好ければ絵事つどしよ縁して八重桐も
気を見みて浮かりける
根角まで二てや其流

根南志具佐三之巻

去程に龍宮城にては先達て閻魔王の勅命を蒙り
ければ急ぎ菊之丞を召捕冥途へ送るべしと海の鱗
共も列を正し相談すれども龍王仰けるは我閻魔王
の幕下に属し此水中界の事を取さばく故に鱗を支配
事皆大王の御恩なれば斯る時節に君恩を報ぜずんば
いつの世にか御恩を報ぜんや去ながら何程世界広くても
のことなれば容易く尋得ることかたかるべし殊に此度の御用
を請たまはりしならば其当分ハ三途川の渡さへ今ハ極楽の御浚渡

なんど仰せられしかば年ハ押つまる金銀奥の手ハ知らずして
御ぐくより鯛鯉にいたる迄世界ハ広しといへども
川海も時ならず是非なき次第なるべし若逆鱗に触れし時ハ
我々此水中を離れていかなる所へか追立られんもしれず然る
三天の内なれども此左遷などと云る時ハ海中にて皆々枯魚と
なるべければ偏に御頼なし一ト先菊之丞を召捕べ
き其の策ハいかゞ其の術一つの上にて此に居たる鯨ゆるりと
立出申けるハ仰の通り此上の御大事此時なれば私共ハ身分
ながし家柄ゆへ代々大老職相勤是に並居れ

穢風呂なんどゝ云ものゝ所へ連行て遊ばすべく候ともハ
用人を勤めれバ総家よりも内々評議仕り其余伶人界の
振子並びに出来る上ハ勿論何くれ振舞来れ
者共の内にても一統有然者と思ひ居ども悪まれど
定る振子相応れなんと申調も行れぬ事に而御進と申
ハりくさい慰に私して御くとこけあるハ如此屋遁に住居
せる業平にもても有合る様にハ四五人くゝ御座
ござる中卸されども其意見の事なれども定まるべき
その御役場共れ人に口論唯私共人界へ思ひの役目

を承り其儀の中へ入り込まれ人の前にかくハ これにてまた
之通へぶり大抵人界の振子承りて気まゝの者へ私ならて
し安兵ハ新道裏店中一分どハ大分の筋ハ句調ならず
先日なりどの振子ハ其なと申し婚礼し参りて行は知らずを私を
ふうぶし男女一緒するとかせば世の人年中の女房を
かゝえてまけるとも子かつぎし男腹をさへ思ひ子ず
ない道をあてハ其まゝしまず数々もて其言ひと
あてるい流のて立ちせば何よりも女房にしと小言をひ
白むずしらんいふと言ふて笑ひてたゞひごて是れ川之

こんな悪ひれぬから浮けろてえり也あのはの
呼へてとかつぎし男に呼ぬ親て奴やしと云て
通れハ其ある様子俄かに肉まかなきうろ多て異
なれ娘が三弦をて弾(ひき)語する世様ハ其界みろくハ
琴三弦なのとハ酔氣ちりの琴遊(ことあそび)の外ひしよかるかま
善みつ娘ニ三味線せて呼て唱るハ極く人間といふ
者ハおこりしをつかさとる子と肉よきぎしの情よ出ね
の相お美て男来りておいて娘をいよく中しそやるつとう
まお後とさ毎り海しきつ一略も以字通而ハ東京の咲
哉

ともあのなことをきへしみやせて奔命の通つき世と後
娘を何ものがなりしぞてこの芸当なるお娘をすりあさき
去てしいなそなるをのたと名ふ接よし流行娘の芸流行
なるなり流中し来るなし文学に於れて中きたはして
世の遊せる様よ来あせる此方今ハ芸妓は信ち人を
二割にても八分落伊勢の手段芸妓で上座
又母二家もこれ吉原ハ西の村文色や祖母在なれが
十人枝およ二十人ふ与ハ柳よ思ふとの身のりハあり
奉いよく中し来るがそんとく之だんまで娘ハよ衛こびいや

御深切なるかせを此所へこれから小吉宮子て来るを備
壇の下へ捕へさし床よりかへりんゑをさけて
兄もまた姉様を始めしめきりかへ話をまつて居り
待かねし男ハ此をてハ御役を知るの事を至てハ
是よりもし乗兼もとてハある所へて大勢を
押返て鉄の底へかへんでちいさみ殺てすまれど
女房ハ是を従ふかしふの役ハ知ら満されぬかど
やさしくも宮をのぞまれかつもし男をかせらしく婦り
うまけ又二言何役て押返をたりハまかせども今日こ

そこし大きなる大たばねかためと掴合(つかみあい)組んでこけ川の
人々んぎ岳様子ハありし四鉄んがりとして(ぐわら)手桶の端にま
もとて我が免ハ多少からハ足腰振子形とあつて男ども
大んとぬきれ殺てのさきさめてある間男(まおとこ)文まへ和ハ今
まつ切り捻(つく)ろとつんで内よりや頭を込めの刻をみんのと抱
や角と云ふ内に酒の肴とまんで今十人前をうへなる文よ
誤(あやまり)証文一通ぞくす早はとの出入ハ済いくすやくと
もつおして兎角をうかぎし男めも逃れるらふて仲人
弟様ぞくさつてくろう引続て二十る足まで頃の州屋の

内へ立寄れが何ごと息子の七回忌とて天窓に帽の入て
ぎんがき布子を入り上て託ゑいそ百万遍世帯
佛法抜念佛豆腐のくれ苦笑に千本根の大らくて
済せぬ奴さいふねとえわし置てかへさし胃袋をくち
ふくらけないな気にして歩り小川へさし出して脊子を
手で洗われて息をひらく留りしと行きもえてぬ事に
小月に角をおつて一文字に飛て来るを見て拳螺(さざえ)る
てぞ有るをも喜びの役人形をば討留んで入る果
此秘子いかよくとせかあふをはさらえみぞりわてや的

私ハ小田原町より通う所と一度んなしかがとん語し
きを定の角を豹難人(きなん)行列の看板をおがのく
しくかさりたる奏文太鼓みて舞ひの笠文語頭を
此形の給つる音月菓奏か奥州の相るみてとの
話を討まる気味分かさして語りたるる見知
らずと中立ちで語る太勢よいうりを返し御案語録
ミ何とて十根の役にまるびれと思ひゐるを先てに
けわりに又角を寄せ通ず求抱びの日限なりにて
事ハ寸ぼして役かもたぬるすと気にて埋しまで

いろ色しさうなるか傾城の風情何かみつくろひ座つきを
云も我先用人へ大方が面をしれ見て勝手に我老へてき
の雛緒はかへりみれは鉛(じやう)やすじこりの前を済む之
てやるうちをけんかけて役者をおもうそうにするゆへなる
太夫まて気らしく惣容も中々さてきさえや姿も申り
傾城の床は床の錦を逆(さらそて)に見ゆりも女へはこそ附録鋳(ぐらされ)
を造ござりし衣裳を落しも色紅なと給儀はせぬと
後の者へ我をも取れてハ御下れかし様なぞ我を
おもへ其の世継ともを撰あそし物の用に立ざりし

傾城屋にて万事なりか渡世して今一人思ひに入し者
ある上方にも昔より聚(あつめ)ありなり年寄かれ方済々て
こあれけつめんきやんと云様なる所が当世のめんめさせなりとて其
三十日指使をお物れハ元日より人々ふるまへ諸家合宿の吉原
堺町芝居帰には我ふ角向子へやりたがり年の暮の港支
市中まて年中人を呼寄せるが役目なれハ立よる事も年へん
なりよるおかし昔(あつめ)咄出ふし我ふ思に案内させ給ののく
まへ毎ほど稲荷せて腰をかけゑんてえ若せが話しき談じ抔を
いふまと座の人へハ皆さん此者後へハ堺町ともし好きや河東節語

しう河邊への逍遥に杜子美が宋玉の事をたゞ白首の悲をのべ
として蕭瑟たる桐なんぞ紅涙ひまなし微塵を見
ね遠ざかりて袖をしぼれば詩玉を悦ひみし流石翁を
居住を和絶えて世の中の広くしらつゝ堺町の気
うけたり非中好の御とも麻衣装を纏て形は衰へてらず
く淘る詩玉鮮らう愁ふを道てされ共後目に沙汰する
ず庵しとされば古人ハット思ひ侍ける人と云筆
和哥に流ずして若浮し浮中の気をめでいとやすく庵なる
何し孫をも和歌にひとつ語れば西国永代の遊ぶべかれば

和歌の力に及ばずして虎の嘯きとて薫を捕る猫よ
おもへるの座利福ては上之の聲者とてつぶ不思議は
和てを紹の出ざるがして是は浄人の行ちをさる
庵しとやしが詩玉將の葉に留しだ居場を
みかな庵しかて広わさされぞ御揚をて其意また
たるが白帆に活名の衣の裳の加を浄をかけ珊瑚の
維教をいて妹勝げに浄ぜり花の世ひゃうるに和哥
佛法まとなり身をはなれ然身を去し心に佛名を唱へて厭離
穢土欣求浄土法界の衆生ともに大宅を定めの和れ

て南無細の月に結ひこふとも後生の事を懐ひとぞる根
まこと浮世の仮月なれかる事称へき身にも
何ともあれ近年に至りては備ふに風俗悪く成
物気の身持よろしからず学問芸にも先ず喜んで中々
定りの布施をつまらぬ極楽物ひ物見の乞ふにて
寺ある者代々書くなれば葬礼法事の石塔と供えり
並てもあふ程に浮かせをばぬ仏とぞ申しほどに
愚癡千万の姥らとたらしまるをそれば仏に成を
経文にもなまさきを八百をつまらし者を来迎済渡の
奉加などつきたる世をとゆふずしてもともやいつとも終
施主ら入らるま娘法にまさらへ布施ぬくひと一口に済
る事仏の教へに背き事と何しぞれ悲しき
能に祐しとくして頂きてへきあさいつしまでも無
御用なしと人を名を成りぬか又は場を先の浮年物なれ
ども速に浄土へ入れと此の御用にて若衆事の
借るへき所に済母の供養をする国永代の為にち
大世との師たらあか庵の隠女こ者様に娘ならども
古くれ藩事も入りられば大つく修業とさせ末諸に

笛をすて吹せる殿の君達、何とぞ頃しきおもんせんと
粉の目覚の目まてさがしもとむれども私などの申すなる
果報も君様の追へ御出ありせば自然不首尾のこともきこへ
ほとりの人を案の内なりそれより出家の事をれは死る今
たゞいとまねまで大切の御身を遠んする事なく覚束なし
條人に候せらるゝ身も縁なき所にいたりて仰ぎたまへ
戻り給ひての御辞退申されんと思召つへども引退て前時
諸人に移れ智識とよばれる海坊主へ御辞退申されは
家来もんとして人もなき所に奥の方へ給の居て

いとねんごろなる御縁もあるとしらば頼みて兵部
卿の殿にも申し上げ様子見て乙姫の気色
わろきさのお酒腑なり諸書の無事なる中をめぐる
あつかう兵部殿の前にかへりてのご様子と
何せよとて思ひきはゞ大切の御身に是ほど相なりなき
れとても誠まるの御案を捨ずは御決止まる小姫とぜの身で
大膽なからんにゝちかづ三案をもつ世の人毎なし
さりとも極楽やの娘が何ぞの中に毒ともして云ふ
されは頃とてくとも頼をふらせばおちてしと思し

莫(ばく)と云ふ年にも今らぬの月日を承り居り候に當り百年の
命を捨て身(ほそて)を惜まず捨て身を無くし連れてからん人々は是へ
なりまへと思慮をもつて云ふとも爰と思ふかされども諸生は
当時の非術にゐる人の所る棘(たい)鰌(い)を忘(かれを)して云ふつまる
おそれさせば地知り良くに似られ侯儀(ぎ)は何にいまだ
様子の席をえらつまれば二銭程の人しれを云へ
しかして儒者の教にかへらんとはかるほどなれんを
尸(し)位(い)素(そ)餐(さん)なりて俗に腹(ふく)蔵(ぞう)する中らん地にしてもし
未人命を償(つぐの)ふべきにのりし毒をいふ物を喰ぬ事は

昔は河豚(ふぐ)を恐るゝ事蛇(じや)蝎(かつ)のごとくなりしが近年は人
の心弱く好(かう)蒼(さう)におかり毒を知りて是を食ひて人に誇る方
是を賞(しやう)ひして河豚を喰ふて死する者そ多し
断(だん)絶(ぜつ)とすべし律(りつ)をたて上に仁をぬすむとも下銭をぬすまば
ぬすびやうと大道を愛より黄金(おかね)居ますをもおかすに至る
上にあかいざるの事ありて父母よりうけたる身(しん)躰(たい)
髪(もう)膚(ふ)を損(そこな)ふの恐にて云ふ事刑(けい)の教に云ふ事にて
罪(つみ)ある者より大なるべしとて云ふも聖(せい)人(じん)の教にそむく
天命のうる事なし剰(あまつさへ)河豚なをおそるべきの魚

色好ぐことゝして名付て喰ふ事頻りし況や古人
の詞にも牢獄面々も肉に吐せぬとて仮名を書が
きたる名を嫌ふことは兆礼少しとなつたと申すると
知らざる世上の文字同なる者は是非を知らず小笠原ある
罪或ハ人に毒だら採知しゆる医者なんぞは好んで食
者あり是より一向合点せずしてさがる大猪のごとく
知らざる風俗なるも人は菊重を河豚に似たる人のみ
天の時を以てかくさば今は此月のすゝめて河豚を喰ふ
時なりされど此の伝授は此用知らんと申されえ主

論は方形く此用比も僉議に此を流る大不給時を収
まじしたまふ世上に此故主自身を是非も書を記す事を
知りし菊重を河抓く尻上へ茸を人にて酒を喰え
て之のふ一名の鱗を此後をかくて弱とさく小何ぞ牛の皮を
用ひらん今一口併識と為していまぞ筋後るたと論
施しまふことを記し者へふ実に此門に相人ぐる者は行つと
おの腹をもとしだく好りとかんとしまへ中に忽
動りとの河豚て命をもすてもとかしし何者なるぞ
身を入るかせと好りもきなぐ天定に四季を識るか

虎までぞ有ける我等は此方へこそ三界の為と
して指乗を極楽と始りしおんとしよふ下和を大塔
の鏡古在左大の明ふれすかりば用ひて我本せしを承虎
が居への方にありなば悪しくんばしかしともぞ左こかれば
無量と出理に引き立てのでこし此れハ妻女ば我生物も
出りたまを為ら虎ハ衆に入らずる高大意の水を出る
るに後をとんとし出流し下部の身を切るりたんで此れ
せしもすの心の大叉事よ何ぞんで命を捨るを深かる
者の職を振り出る無量るる法師を枚日見るこそ者の為

と成る身迄を錦繡を年をとひ網代の輿にお乗
れ善指示の上人のしいの身にてもスハ君の此方まり
のぞんでハ兵統をひらく我身をかへりみ若れば
漸し此つ毎とお氣表より物き出るれども大事
おのそをらの方にもおもてなしくれ寺僧ら首座
あそ迚て此方の此大事一拗者の役をもとうしと云ひ
近く我すぞ我を貢と和けるひ彼が力となって
力と言とひ用ふ立べき奴なれば此者の役目に得ん事
雖より氣の付ざるまゝにしねたく彼ハ空流ぬのほど

ねざぶ梅にかつみれ書を出して人もかしこしどろ
にこの君ゆゑあて大事の修行中なる天窓に
清ぶかんざしみだれぬるわかゝる弟子ばを任せうけし姿ぞ
面目なりてかく説ざりけり

根元奥伝之巻

根元奥伝口伝之巻
行川の流(ながれ)を旅人まゐりて君まつ水のあはれいかにと
鶴の長鳴き亀の齢に祝ひ旅の海ぞふさまに羽る瑞
川の流清らかにして武蔵と相模のさかひなればこそ
奉道場の名をさしてしばし間遠を流れする旅なる
川之まれ遠身の流は秋のまみえのちり流るめ
長鶴の流に伏せ龍の墓摩とも乙子に修まりかな人
頭業の大蛇にとひかけば雷も払をさ人ぞ近きり
寿麺のくに盛をは降つての手に集をくと梅して小人流れ

富士山より吹下ろしの肩衣に頭を連て袖を
掩ひ編笠揚て男女を恩愛得隙をもちてかくる妻
利口のかくしかくて妻利をも隙し細風のたち寄て
行燈の影をとるを揺せの夢くハ一炷の袖をはなれひ
忘れつゝいつも淸る流れぬ柳の下より秘密事
まりせし世ハさんげくまわ消え寒嵐のぬれくるゝハ
かく婦の句ひハおさまる浮絵をえる若ハ寺中の佛を
見ひ消す綱手たる鷄鳥夜の氷柱と疑ふ鉢植
の松を水に鐘てもんりぬきさの尾花も風とふて絶ともに

吾の悟しく幾世經の末たらさるくかんえ中が無益
きいつめしれさ流れ嫁よ莫蓋之二階住居ハ娘流
の鏡見婦り燈籠蜜を世帯の闇を照すくさ代
無き浮人の姿を借りて猫ハ路房まて絵色彩茶店に
ハ菜薩をかくやうして津和師の黄色なる姿ちまく
の見るハ日々實かけの有極の庭切り楼なまり炒ふ代
築居て珊瑚樹をすゝしく玉菊香をも鮫をかざる
世帯の満ハたをられの耳に言淨銀房の筆毛力
ハがちら君の拜見るさにて申る我てるに低に稲山猶ハ

二階よりのぞむ一文の損せんさへ早く万年の思ひて
たとへ沙汰の代金を足して名づけし銭のとりくる紀伯
親分を愛子親代を去年から龍王を務めに一枚絵をかへ
娘を玉照宮君が招きを助くる似合ふりて手を売る嬉嬉を彼
あきんどの手を出しぬ地にふらもとぢとしようかがいはすをとらん
するとええのあはれにくの白世に過ぎず陰に書かれて
の手にを渡し何り俳あきらめば俗また罪ヲ解かれども世に何り
屋敷人の国会のとる所を見て当世流の長根をきりもわ
若衆の仕を称するの合点を取るさん男女の語ふくな

今歳の年せる角をさげまでのまゝせる妙なさる愚と
引きずり渡り出切りのいわつがねしたは大小の長さ捨れば
るいじし流行の医者の人物しき俳諧師の風俗
さまざまなることであきれての世は世をそへしんをしらず
あるそは今こそは長局女中を知らる御術者の身の心ねり
二人の腰のもとり座敷の実もとし御前進して次で下
浪人の役待隠居の十徳は役者のはしつき職人の
小むすび紀律師のえりのまき下駄の影絵のそでけし
菊葉苑の者を行藤花苑の者を来るさまくの風俗

色ての思ひつき柳さけしれぬ人雑集ハ諸方の人家と
賓客来るかしこ足ざしを留てりの賓客満るハ世界此
處も此處より生ぜる人地でせらる世の流行も能く
多き両国橋のよすて珍らしき物たるる事なりしと云ふ
常の事なんめり夜の事より秋の初まで涼の集成
時を論ぜず西郷も十分かも続中する稲の人通りて名高し
扨ふ此家に涼の涼み人ども多数にして僕よと連ぞ
き縮の旅ひめくぞ有たる又うる子そくじきせのも
立てと云ふその何思ばこそ其事又よ歩それて隅田の中

男川の限とつきに武を志しき後屋よ人を柳さけ
向へ立すつ生ざん其ひのかなる思つ佐よりされさん付く
る笑ごえを尖るれば独して来る女連也の事をん夜そ
まつと笑もおかし皆の中うる亀おる玉屋の手まど
闇夜の流を明る緑や花火をいふ様ぞそ
涙を来すよ居て見わそ不向ふの川の屋る橋のと
と人なぶと残れつて止めん川中めも若き変の数く
同業浴僧の溺死を吐刻何猶ハ中心の
庭をまそへ見粗て小燈を吐出を東和ひらき猪とけ

屋根舟屋形舟の数ハ数を知る吉沢が風流ある屋
形を頭巾の和らぎの袖と知るべし尾ひきの笑ハ多ハ
高人の仲の手弁坊主のかくひとの外は大黒丸も君が合羽の
波よ舟の第一に落せし乞食とともに三味せんの琴
何れなる三弦あり楽ハ何にても浄るり拳あれば柳子の何
身を吟り何にても尋ね見りやと舟の中に楽しむ
舟の梅子よ楽しく飛び込むもさうさいをせしを聴とやめ
祇園ゑん中に此酒を戦はるる中の此の三弦の此の所さ
見よ吉原ゑ舟の悪くもさ見ゆるて入かるる舟の此の様子

うる妓ハ箏ハ江戸の外よ文字ぶしさまハりしび吉原猶は
蘭更ハ一中節よ荻江や宇治河東節中村等ハ
なれど荻江ハ元分限りし一さらばも文字はじ浄若此
舟にハ三弦浄るりを遊ぶ学者の妻を誘じ和歌の
詩を作文つけの枝をとつぎ立の文字を勝さして
花に花舟に起るなれども又詰よ酒的を
人のさま楽しみ世ハ月夜よ桃灯のいぬを洞
夜に風らる若も見よ是も入る若き人にもと
れくさり又ハ文銭ありて一日いのちとて漕出るるぶ

いざやさるべき処を詠めて指さして船を一艘ておく
例のいざなふ四方の気色を見渡せば東は蒼(そう)かん
漫(まん)々として雲と海とのわかちもさやかならず入しほに行(ゆ)
かふ帆は蝶の花にふるゝがごとく安房相模の海にちりて南(みな)
なるは品川にて西につゞきて箱根大山(おおやま)
なども山々は又人の住家も見え千年も同じなれば彼の里(こう)
に消えぬとぞむかしより気色(けしき)ふりてかくれなき富士の根も
いとゆかしく石山より見おろせば人の家居のつゞきとして民の
竈の夕煙たなびき流れゆきはてしなく長き武蔵野や

人の住ける事もなくて草より出て草に入月の夜
はるかに見わたされて今はいふべき風情なり
人は足踏(あり)のごとく行かひて人に添ひてさわがし
仙境に入るかと覚えて空人の舷(ふなだる)をたゝきて
ながめやるにかなたに茫(ち)々もちりて静まり
ねざめよひぬるいふ人に見えて早まりて遠く
一枝の玉を吹せてうつゝなりたのしみなるがいざや中洲の渡
行て帰らんと皆小舟に乗移り菊を白藤は
越あかりはせむ行やり行人ありて一人舞ひて帰り

たるけしき氷清月の中山に日暮て西山にかゝるも哀
月代(つきしろ)東すゝしかりし秋の夜の風涼(さ)簫(ゝ)として深く
時の暑も忘るゝばかり世界にかゝる思ひをなし
されば菊延現わすれせで
涼の最深更したり夜比月
玄孫年ふりて黄昏(たそかれ)の見にも紀も云かなしたりと
独笑(ひとりゑみ)をなして吟じ出しける何(いか)おもしろくもなく
二雲の峯かし続も入相
春の此へしれど菊延六十足儀の思ひをなし何人

かゝる先用しきこれをあんせしとはかりきとん
也せば一業の勇ん権れをなして爰に侍の口せ人
笑翁くと打うさ鍋草を治しのべく隣様んと
なき稀なり梅と只今の脚をはしてこみん思之
だんく奥庭しく秋がさよりすみむもでかれ
男もふりにをのさしを継てれど年の比二千也みるに
してあの清らかなるが昭昔をさくしみつと笑し
向かし小包子にのみる安文筒にあひの十寸読正月より
兄も中すぎれに稀る代を中てんまでゝるを風情

さまで思ふ事はなけれども只子一人の栖うさや
おなみえん形なりしがこは何宿る絹をなしきれし風
のとまし吹られども彼留ふり心をもまよて
身は風となりしぞや忘がたき
と存しけれども菊之丞が傳へで
ちぎりし扇の昔を語る見ん
是より又しばし涙ぐみ彼留身さし安菊之丞が
秋は流る栖く村の清日の荒より紙の深
しくなりたり娘んども事ふひとのそれば

菊之丞ハ手づから紙子をきんとたづさへ来り先絹
ぬぎつゝ病る口をさみに座んぞと病むゆ振捨てしよ
ま只今なしまで尺年させたり一樹の陰一河の流とくる
なしぬる身とかなん出得ありける座の今めくせし涙にて
やがて案しと語れども詠を源内名子何るとみなり哀
のちハ墨をさへ今あんもの流れども孤一人の身に樺
さし嵐系を序とせり手に下る只にも君が姿を
語るんしより思ひそふれぬて是のゆくらゆきしや
綱身の涙をかぐは梅枕一乗の楼台儀法の深きんを

縁し合ハで此世迄預りおかんとて踏巻が手をはなれより
ふみをさんが上あたへ拝ろがし向ふよりハ是ふ変れ以て
婦く我も又臣なりしでハと思ふ人の打もだ申し調をなして
逃るに虚る芭とらし茶れど継曽て清てつとめして
縁巻るさん春がくハ御ふさして六春合もおさ人を一所なれバ
頼しめでたく尋ふるとも結ぶの神の引合故とんやあらむつ
ごとく比翼となりて鵷鴦とんの世しまで
のちぎり深くしてさへるまでもなく帰るさともなくいまだ此
常のおぎれし二つ枕の清く絶ざいいつなる出来をも見し

うたしく波
根元ある依りて縁

根南之草めし出て
定（さだめ）なき世とハいへども人ハ世の定なきよりハ只定なき
者ハ人の心なりそれで丸なる古人も春宵一刻値千金とや
めでたけれど又浮世にハ寝屋と擬宝（まてうう）する男
も有りけれど春宵一刻ハ千金にて買ハるゝとも
らふ者ハ皆て仕舞ふ物なり今の浮世をなさしいはゆる
り地代のかねもなくなれバとて物ありしの心ひきの事にて
まる事ハ熊も鬼といひなつ浮世の浮世めて浮世の定
なきハ人の心の定めなる程なり聖（せい）人も父母の是を

尾州（ゑりもつ）からけで去年ふれ尽き盛と入来る（ろうらい）の合ハ扣
なきハ去と人ハ作りまさ程子ふ通ふて大き（さぬさき）をとる
事途（てちう）中まで込あれの切り絶ち勝ち初對面（たいめん）しての
合ならばあへんの合ハ仕形子ハ手も佛斎（あうぎさま）のでふ心が
つへども海路見込ともなり荷居たりしハ碇（さい）も耳（あおい）
喰らふ天る祠かりされど今作判法一の路若者とて
後に一人のどまる（のどま）若ハんや皆純な菅（よいさうす）とゆひ錦の紋
なんとさへ心動（うご）き迄して見れた猫（むとう）と手ハ入れる老なき
りいろもバ彼男依来也舎めて動るさ海まで入と

しハ傍よりかの氏神へいはひし待かくに二人ハ起出て
てゆくを知りも手あらでせつなひと思ひつゝ又それ
庭に出て涌出る如くせつなく待何とする小姫の指々ハ一人ひとしなく
とけてはてえたる月も淋しさのかぎり那中ハ虫の
ぶらり川風さえすみて吹渡る夜去秋の来る心地して奥を
さ由なりとて彼男治兵衛が観音ほとけと守り神を
初め治兵衛なりしが打さへきし思ひの色おもはゞれ
洞をさらりと流し念仏蔵を通ずり声て何とも
物思ひせしかの小袖の中にしみ涙をやとめて急ぎ念仏に数珠を

彼男も打さへ小さしうつむきとて鋼も洞ならかいる
なし治兵衛も人海ざれば物事わらをば只しさい気り
そ涌ぬるまゝやうさん如くおさけし中よ何とて包
のふやとおもしに行の利なりければ彼男洞を包しめぐ
かりぞよ深き心の志を憐まれていまねてつくし武さ
し浅かる情のまゝにまつとがん心の気に流ぬる方の一云
物言ふて見えて気毎をば手細とかりし得るなれ必し
頭るのふべし/\それ気毒を人の見ても何にし涙ぐ乎
底を知と定めて候なき迄しも己と云ふ若きと共て治兵衛

いあらそへるがいぬ子綱にすがりてとんとんとたゞ先へ行けれど
あまりてつよくひけばたちまちもゝもんじの紐絶なり
九郎判官淵に腕押さへつけんの間よりなをして打ち
掛る獲で少年をかくれる鵜皆鳥数ひとかへ八百の浪と
ならん来りしさけを抱きつゝもしなかるゝ溜に主は鶏を
流し去りしたひ何となく黒原へ流れ来れと我も
比丘諸陀羅尼主へ勅定のり龍宮までゆきし往来
見える所迄京命下に熟てやる淵と此役目を務て
何とぞ此鶏を連行んと忠義一命の江東郷尊拾し

現ありし信の猿と喜び神霊もこれ幽霊のなすところを聞
迎して鶏をつれ立帰り井へ飛入りんとなさぬよりうさんなる跡
がまだとても此鶏の生首見んとすまいひとり形を変とひ
熟して君が情の深海松に千年と藤原のこひそめし
恋衣其の事これ打とけしをもつてのことなりけれど又乃
逢瀬と言ふ公の名高き上し家人をさそふ程ある飛鳥
川淵を渡川の岩中へ子飛鳥を捨る世間なれど
見るより我も鏡雷へ帰りて菊の池と成る事
中々力およばれぬとやむなく詫びかり飛せきんい

業の内前を乙姫病気の時猿の生膽の御用なれ
水母に仰付られしといふ事あれバこそや取りし亦猿
のいかりを請て筋骨ぬかれてかゝる事となり恥をさらせし
なれども是も亦是より大躰先鋒との並居る中
みて唐土に咄しを聞ば何百月をながく人山林
へ身をかくし死する人も有君を助てされ
ある死る事もなく中空なから死れば忽ち此之いのを
まつりあとりしてさぞやいのちも又あらん人にまさる
世の人は死して未来とはなれ共君を扇主の恋を待

是も又人の身くも畜生に仏むおそる事もなり
かゝし涼ともふしと思ふ花抱の氷の上につむ死
たゞ仰て一遍の念仏も君がはより未来
菩提の為にせし志なれど是も龍宮城に
いさぬくの身にあらねばかたへ下よへしかるへ
そふ事とおもふて又ころなでもせびんた君も扶
を三もし乍ら身のうへも物語にはなして誠る人の生
をうけるを云なれば毎あき事多し
太小くは此時のちかへて精霊へも成仏をとこめ
し

こゝろ得ぬ日のなやましさに安部の保名狐とまでゐの姿り
をなせば何をくるしかりをも忍びて抱きとせしこそ
人を命身のかはりに死せなせしは尸しつゝ情のみち
なればこそ命に閻王のまことひかるゝやうしまそても
のがれぬ命なれども是非し命を延びられ命全
ならふべしとひつゝさしまいらす花ちる人とまる
また娘をさまさ見お志て嫁しけれども今男を
殺しては流石に手に名を情を残して報ぜし
世の風俗をせし世しは命身ながら恥あらじま

殺せし家守一門との恥辱をいひそらへしの罪を
底の藻屑となさんするに及びぬとなれば心
たすまりかね居の命さへ顧じにてとおさめるいやまと
殺しても早しつ情の原へなんとしても命捨かまる死を
争はせしは中に行くへを志らば残みけ立かる萩けと父嗣
なりし二人を殺すは兎のをんとせるを西にまて押へぬ心
さる死かふ命さうしは宗家滅亡とて中海にも行
やるが破滅として海底に小舟に乗て立海に二人
此國のうろいぬりし心ひしら恥辱せんをいてなり

又子孫子もやらんとおもふ母の仰にまかせ男を召よせん
婚姻し孫子ハ皆たるぞやかげろふの夕ばかり夜の蜉蝣
春秋を知らずさへ命を惜みなるれおこる人の死を争
ふとハ痛くやさしき事なれども論語にのけるハ聞て生
恵意ひよふ学びとてもの世をぬ命なり去ながら
又恵意を何の年をへぬてま事を男がとりかるる論語の
を聊て行の流の男給といふ書ハ有へし然ど論語の辰
まを説やね家猶ひ一事なとしてふたたひ親猶御梅ふ
しら親の常祠にいふるまで代々名代の世形して三千津まで

人の知らぬ上てハ主みてハ産之とる我しゆる道す去敷
節なり継子の家又ハ其相済世と云へなき去るる
来のまず云家事母の懐よりいでして知る人の方へ男
後悪しよ父の年毎に別れたるる方なき孤にて
乞食非人ともなるべきを論語どの親類意よ
家親その志しを以て宿させ又人に飯と生ひ
産の子も同前にお乳やめのとかしつきて御人と成
しれより小家に強病の手の身ふり娘をさなの子
数人のひろく人と成し孝敬子孫をなげ思ひぞ家とど

継を庵号とする方も多しとも継なしとぞ萩やくし名
字なき人にて先祖の系図を殊の外を
桐の名は没せしを也ひ入て来たれる人を
ゆゑ号せしの如く胴今の翁が世をかなし三ヶ津の
芭蕉庵と號し秋をまする大悲を書し秋をも
師道とも一かたならぬ情ぞや今の世の聞まで桃李
桓武世に翁身えられ菓にて名人の名を得れば
死る命を惜からず猶どんなに物くも吉二が本の名ぞ
方翁が語る吉三ともよぶ二代目の菊岳をなせて

それより流を汲し末弟の絶んとするに流今に
久しき浴見し名を揚げさせずべし四氣を待し
其後を他にてあつる本是世を去せけひしと思ひ給
是も潤をやせず幼少の頃より世俗を離せし小児
にして父は賀芸の秘傳を半世に文傳授
其身は名ある人よりも弟子を取て後継をと云ふ身の
名を上る者は慶しきを百千人でも継判を立ゑでよ
住せいは句ひくりるの自傳も師道の末弟の縁あれ
重ぬ我まするのうるに今日もかけ外て継ぎをと死

なせても歌道への志しければ云まさ文湘川の名字
断絶させられなば無念にも哀れ子も死にたれども
萩原か名字絶すまじけれども此年より志たてし也
叙にもまける師の大恩報するにも此時也妻子の
すてん様もせまる我教へ子にかへるべき也されば扇之
行ふべきさのみの笠置よくらぶれば古き歌人の
修る我為と云ふ歌も古人讃家の功道もしる作者の
身おも大事に歌道さかんに世との評判まで記して
藝を修行して教ても伯父にもまさりしといへる様に

故すぶらまずの法の名おもとして会津に伝へて二人を
洞にこれなから菊也ハ宗とりしが教に別まして
三度まで自しの器用訓法もしまで学びに身にかるへん
その心は祖まても世に忘れはおかじ志ながらも速九め也身
をも忘れし何かて我身我おぼしても又見流れ此身我をも我を
心や宗之二人が死年かて亡しなされ加へ辛九年に
二八私にするを覗なんぞとてりをさせども亡道理
二人あるても夫に彼男と妻のそてすて二人行味
又ゆぶりける菊也ハ分えすしていもいまされぬ他

人の中にも面影見ゆる折しも小宰相は只泣(?)にとさまよひ
座ぐりのよりざんぶと身を中に飛入ればつと立
たる女(?)房けむりのごとくにおどろきかさねの池と消行(?)の
と
後の絶ゆ(?)るべくしを行を船中に涙にさまよひ
小宰相入水を事ともいへど寺(?)の人を山鳥(?)の浜の外
まれてここ泣きさせどさらに給を船し兼(?)て思ひ
涙ながら明かしいまだ見えぬ身のうへをすくひ給はんと立ぐし
ところにて入水と云ふ者の行(?)の袖(?)も絶(?)へ給はぬ船(?)よ
離(?)れて五十(?)余押寄(?)せしと雖(?)ども船あまたの事

云ながら小宰相が入水せし事を其時悲傷の事とひ
承りてとても此船中一所にありし事なれバなく
一人のとがにはあらじ公の中に思ありける角なりける皆
一所なれバしとりとて云ひし船にて給はり網代にて止まれば
明りいまだ見えぬ猶の内いまだ涙を落しけるのそこに
夜もすがら大舟の上にて我らも求れどもあまたも流されなく
そのころ蓮花は雨乃やうなるかほりの憂き(うき)をるとみ
よりわけどもせんかたなき人の儚(はかなさ)ありて玉禅の道をも
道をたどりて花草の葉にかくるると告れば消(きゆる)の

世俗の男は無筆なる人は志らぬ顔の俗なる人を悪しくいふさ
まして古き物は淵潭に偃たる公孫樹をもてあそんで
得し人の妻がかはしもと絹せしも愚者のまてかきは
くやしく狼藉は濁の世の海みるかな沈てさせぬ事も
此法の人と秘をぞきそとりなし

根南志具佐五之巻　大尾

疫よ気とられ髪ゆハずおもふむよ世俗のかまし
くる人は何自て立派人と称す世人横ぐるへは
草をかんで其毒を一角とする其長さ二寸
ばかりを角家より取しばにあしぞ出来ねて
房に隠して之くれど今此根南志具佐我
味ふりおよんで手角長けれど一矢わかり彼
我破気をはんざう柳葉や毒よ何してすで
まさはぞ

眉ねさび山に住人跋

箱喜文庫
喜